

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370510

研究課題名(和文) 大日経疏の古訓点についての日本語学的研究

研究課題名(英文) Research on Glosses to Dainichikyosho from the Viewpoint of Japanese Linguistics

研究代表者

月本 雅幸 (Tsukimoto, Masayuki)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60143137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は主として平安時代に真言宗、天台宗の密教において重視された大日経疏(大日経に対する注釈書)に記入された古訓点(漢文の日本語としての読み)について、日本語学の立場から検討を加えたものである。

研究方法は実際に平安時代に訓点を記入された資料の原本を調査し、撮影することによってデータを入手し、それを解読・検討して、その資料やそこに示された言語の性格を検討するものである。その結果、大日経疏の古訓点の日本語は、古い要素と新しい要素を混合したものであり、それは一面では古い伝統を守りながら、他方、新たな検討の結果を導入しようとしたものであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research we focused on the Japanese glosses, that is Japanese readings added to classical Chinese texts of Dainichikyosho which were written in the Heian period (from 9th to 12th centuries) from the viewpoint of Japanese linguistics. Dainichikyosho is a commentary on Mahavairocana Sutra which is one of the most important esoteric Buddhist scriptures read by Buddhist monks of Shingon and Tendai sects in Japan.

The findings of our research are as follows: Japanese language written as glosses to Dainichikyosho contains both old elements (Japanese of 9th through 10th centuries) and new ones (Japanese language of 11th through 12th centuries) and this is the result of making efforts to invent new readings while following old ones conducted by Buddhist monks.

研究分野：日本語学

キーワード：古訓点 漢文訓読 大日経疏 日本語史

1. 研究開始当初の背景

(1) 古訓点資料とその言語の研究は、明治末年以来発展を続けて来たのであるが、近年は研究者人口も少なく、特に若い研究者にこの分野の研究を開始しようという者は稀となっている。いわば、古訓点資料の研究は後継者難に陥っており、衰微の危機に瀕していると言わなければならない。これは誇張ではなく、学界の関係者にとって共通の認識である。研究代表者(以下「代表者」とする)はこのような問題の解決のために、新たな研究方法を導入することを模索してきたが、その過程で、申請者がこれまで35年以上に亘り真言宗系寺院に所蔵される古訓点資料を調査した経験から、真言宗系の訓点資料を次の4つのグループに分けて検討をすることとした。

(2) それらは即ち、A大日経・大日経疏類、B胎蔵四部儀軌をはじめとする儀軌類、C空海撰述書類、Dその他、である。これらのうち、現存する点数の多いのはBとDであるが、それにもかかわらず、真言宗において最も重視された最重要の訓点資料はA、その中でも特に大日経疏であるとの認識を代表者は得るに到った。大日経疏は正式には大毘盧遮那成佛経疏と称し、密教の根本經典の1つである「大毘盧遮那神変加持経」7巻の(正確には前の6巻)の注釈書で、善無畏(637~735)の講述したものを一行(683~727)が筆録、解説したものである。これには数種の異本があり、日本の真言宗で用いたのは空海(774~835)の20巻本である。これらに平安時代の訓点の記入されたものが約20点知られており、それにはしばしば複数種の詳密な訓点の記入されている。

2. 研究の目的

(1) 前述の通り、「大日経疏」には約20点古訓点資料が知られているが、これらについての研究は決して多くない。まず、大日経疏の古訓点の全体について述べた論文は次の2点のみである。A築島裕「大日経疏の古訓法について」(『五味智英先生古稀記念上代文学論叢・論集上代文学第八冊』)1977年、B築島裕「大日経疏訓説の源流と伝承について」(『訓点語と訓点資料』101輯)、2008年。また、大日経疏に記入された古訓点を解読して示したのも次のものがあるに過ぎない。C『高山寺資料叢書高山寺古訓点資料第三 大毘盧遮那成仏経疏』1986年。D築島裕「高山寺蔵本大毘盧遮那経疏卷第三康和点釈文(一)(二)」(『訓点語と訓点資料』84輯、91輯)、1990年、1993年、E築島裕「高山寺蔵本大毘盧遮那経疏卷第二康和点釈文(一)~(三)」(『訓点語と訓点資料』103~105輯)、1999~2000年、F築島裕「高山寺蔵本大毘

盧遮那経疏卷第三康和五年点釈文稿(一)~(三)」(『平成十八~二十年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』)2007~2009年、G花野憲道「仁和寺蔵『大毘盧遮那成佛経疏』卷第一寛治七年点釈文編一~二」(『訓点語と訓点資料』110輯、127輯)2003年、2011年、H月本雅幸「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏卷第十五訳文稿(一)~(九)」(『平成十三年度~二十四年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』)2002~2012年。

(2) このように大日経疏の古訓点に関する論考や解読文の公表が遅れている理由としては次のものが挙げられよう。A大日経疏の訓点本が真言宗寺院において秘蔵され、容易に研究者が近づけなかったこと。B全体で20巻にも及ぶ大量の資料であり、全体を解読した上で検討を行うことが容易でなかったこと。C内容が難解であると共に秘密性があり、現代の注釈書もなく、解読が容易でないこと。

(3) 大日経疏の古訓点についての研究状況は上のごとくであるが、代表者はこれまで約10年間の準備期間を経て、漸くこの研究に本格的に着手することとした。古訓点の解読能力、資料所蔵先の理解と協力、協力者(大学院生)の体制等が整い、研究計画遂行が可能になったと判断したためである。

(4) このような状況を受けて、本研究課題では可能な限り複数資料の全文を解読した上での比較検討を行い、より広範な調査研究を行って大日経疏の訓点とその言語についての分析を行うこととした。さらに、この作業を通じて、大日経疏の古訓点をどのように日本語史研究の資料として使用すべきかという問題の解明を行うこととした。

3. 研究の方法

(1) 重要資料の選定 既に手許に蓄積してある古訓点資料のデータに基づき、調査考察の対象とすべき大日経疏の古訓点資料を選定する。対象は主として京都及びその周辺にある真言宗系寺院に所蔵される資料とするが、東京大学にも数点所蔵しているため、これについては必ず調査対象に含めるものとする。

(2) 訓点資料の原本調査 書誌的なデータを採取し、加點年代等、基礎的な事実を確認する。可能な限り原資料を調査するが、実際には研究対象の訓点資料は京都またはその周辺の寺院に所蔵されることが多いため、調査旅行を実施する。

(3) 訓点資料の撮影 必要と考えられ、かつ所蔵者の許可を得た資料について、デジタル撮影を行う。

(4) 訓点資料の解説 撮影したものを中心に、調査した古訓点資料を解説し、平安時代の訓読の様相を再現する。その際には解説に正確を期することは当然のこととして、文献の内容に即し、それを理解した上で解説するように努める。これは従来の訓点資料研究が、ややもすれば言語の外形にのみ重点を置いた傾向があったことに対する反省でもある。

(5) 訓点資料の分析・検討 これは次のような観点から行う。個々の訓点資料について、そこに記された言語の性格、特にその年代性に注意する。使用された語彙や語法から、その言語が新しいか古いかを判断する。また、それらが新旧混淆の様相を呈していることもあるであろうことを予想する。そして複数の大日経疏の訓点資料に記入された訓点を比較し、その伝承がどのように行われていたかを検討する。そもそも、当時の訓点資料の加点に際しては、従来の訓点とは無関係に新たな訓点を創始する場合、従来の訓点を忠実に写す場合、従来の訓点を少し改変して写す場合、別の系統の訓点を併記する場合、などのケースがあったと考えられる。当該資料がどのような訓点の伝承を経たものであるかを慎重に検討する。

4. 研究成果

(1) 3. で示した研究方法により、次のようなことが明らかになった。まず、大日経疏が真言宗系の古訓点資料の中で質量共に、最も重要な資料であることが明らかになった。このことは仏教学的にはよく知られた事実であるが、古訓点研究、また日本語学的研究の立場からも言えることであって、真言宗の中で、大日経疏がいかに現在に至るまで重視され訓点記入に際しても細心の注意が払われているかが判明したのである。古訓点資料の中には、1冊または1巻の冒頭こそ詳細な訓点が入記されていても、後半あるいは途中からは訓点が入記が粗雑になり、中には訓点記入が放棄されてしまう場合もあるが、大日経疏の場合にはそのようなことがなく、必ず最後まで均質な訓点が入記されている。これはいかに大日経疏が重視され、かつそこに訓点を記入することが必要でもあり、また重要でもあったかを示すものであると考えられる。さらに天台宗にあっても、大日経疏は重要な位置を占めていたと考えられる。

(2) 大日経疏の古訓点の言語的特徴は既に築島裕(1926~2011)によっても指摘されていることではあるが、古い要素(10世紀の日本語の要素)と新しい要素(その訓点が入記された時期)が混合していることが改めて確認された。一例を挙げれば、程度の甚だしいことを述べる漢文の原文「太」の文字に対し、12世紀初頭の訓点で、「イト」の訓が入記されることがある。通常12世紀の仏典の訓点ではこの意味の「太」について

は「ハナハダ」というのが普通であって、「いと」は和文系の語彙であることが知られている。和文系の語彙と漢文訓読系の語彙の対立は11世紀に成立したと見られるから、「太」に「イト」の傍訓を記入するのは、10世紀の様相を残していることとなる。つまり、部分的には古いものを残しながら、それだけを忠実に守るのではなく、新しい要素も交えながら、訓点を伝承して行ったと考えられるのである。なお、古い要素には強調の助詞の「イ」、文末を「ゾ」で結ぶ形式、「者」という字について、人間を表す場合は「ヒト」、無生物や動物を表す場合は「モノ」と訓んで区別することなどがある。

(3) 前項で示した、新しい要素と古い要素の混合ということ、古い訓法と新しい訓法の共存ということの意味する。訓点の伝承には種々の類型があり、古い伝承をそのまま残し、墨守する場合、古い伝承をある程度残しながら、新しい要素も盛り込む場合、古い伝承を残さず、新しい訓法に置き換える場合、大きく分けて3つの部類に分かれるが、大日経疏の場合は、第二の類型に属するものと思われる。これは大日経疏の古訓点、伝統的なものを尊重しながらも、新しい解釈と工夫を反映して、新しい要素を取り込むものであったことを示している。そして、このことは、常によりよい訓読を志向していた平安時代の学僧達の立場を反映しているものと考えられる。

(4) 築島裕は前述の「研究の目的」(1) Aの文献で、大日経疏の訓点は大きく分けて真言宗広沢流、真言宗小野流、天台宗の3系統に大別されると主張した。今回の研究の結果、これについては概ね肯定されるものの、築島の主張したほど、明確に系統が分離するものではないことが、明らかになった。これは、前項で示したように、大日経疏の古訓点、より良い訓読を模索する過程で複数の訓法が参照され、混合されたことを示すものと思われる。従って、この点は、大日経疏の古訓点を日本語史の資料として使用する場合に、注意すべきである。

(5) 既に述べたように、大日経疏の古訓点は質量共に重要なものでありながら、これまで十分に日本語史の資料として利用されて来なかった。本課題の研究結果としての大日経疏諸本の解説文はまだ十分に公開の機会を得ていないが、今後種々の方法により、公表することにより、広く他の日本語史研究者の利用に供することとする次第である。

(6) 今回の研究課題で当初解明を企図しながら、今後の課題として積み残したのは、大日経疏の訓読において、語句や文の順序を入れ替えて読む、所謂「爛脱」について

の検討である。これについては既に平安時代に発生し、次第に複雑化したものと思われる程度の見通しは得られたものの、詳細な検討はできなかった。これについては、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

月本雅幸、高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿(十)、平成二十五年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、査読なし、2014、81-84

月本雅幸、高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿(十一)、平成二十六年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、査読なし、2015、81-84

月本雅幸、高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿(十二)、平成二十七年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、査読なし、2016、81-84

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

月本 雅幸 (Tsukimoto, Masayuki)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：6 0 1 4 3 1 3 7

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：